

激しい偏食をもつりんちゃんと仲間たちとの3年間

小島 貴子

はじめに

「あんたはクビよ!」「あっちへ行け!」

特別支援学級の担任12年目で、新しいクラスを立ち上げることになり意気揚々としていた私に、彼女はびしゃりとそんな言葉を投げつけた。彼女の名前はりんちゃん(仮名、以下同じ)。

広汎性発達障害と診断された4年生の女の子で、幼少期は市内の障害児通園施設で「超」がつくほど有名な多動児だったようだ。

彼女と出会ったのは6年前。それから3年、私は彼女と3人の仲間たちから本当に多くのことを教えてもらうことになる。

この記録は彼女と過ごした悪戦苦闘の3年間の日々的一端である。

1 おひさま学級誕生(1年目)

新しい学校で立ち上げた支援学級は、2年ゆみちゃん(知的障害)、2年まほちゃん(知的障害・広汎性発達障害)、3年あっくん(発達障害(LD))、4年りんちゃん(知的障害・広汎性発達障害)の4名。たった4名だが、担任一人でかかわるには存在感いっぱいの子どもたちだった。

◆嵐の前の静けさ

りんちゃんが前年度まで通っていた学校の支援学級の先生からは、「とにかくたいへん。気が向かないと何もしない」「支援学校でないといけないのでは」という申し送りがあり、出会う前から手ごわい子だろうと覚悟をしていた。

ところが、初日、りんちゃんは、始業式も入学式もほぼ問題なく参加できた。2年生のまほちゃんだけが、会場の不安感から大きな声をあげていたの、そっと外に連れ出したが、教室に戻ってきた時の4人の様子から楽しいことがたくさんできるぞ!という予感でいっぱいだった。まずは全員が安心して自分を出せるような居場所と信頼関係をつくることから始めようと「おひさま学級」と名づけた。

◆りんちゃんの給食

けれど給食が始まった日、エプロンを着て踊るようなポーズをしてはトイレの前の鏡で自分の顔を見ていたりんちゃんが、なかなか教室に戻ってこない。何度誘いに行ってもダメ。しかしみんなが席について食べ始めたらやっとなんか戻ってきた。「ものすごい偏食」とは聞いていたのでとりあえず様子を見ていると、まず牛乳を自分で持ってきたカップに空け(ストローから飲むのが嫌いな様子)、じっと考え込むように固まった。するといきなりまほちゃんが、大声で「きのこきらい!」「いやあー!」と泣きだした。それを見てりんちゃん、彼女に向かって「うるさい!」と一喝。そしてぱくっときのこを飲み込んで見せた。そのあとは目をつぶるようにして本当にいやいやだけど意を決して!という感じで、カップの牛乳も飲みほした。

入学した時は、給食が一口も食べられなかったという彼女が、ここまでになるには当時の先生たちが信念をもって根気よくかかわったのだろう。まずは「りんちゃんすごい」と思いきり褒めた。

それまで在籍していた学校の知的障害特別支援学級では、指示したことをやるまでは次のことをさせない、例外を認めず、どんなに時間がかかってもその子のやるべきことはやり通させる…そしてやり通せたことを褒めて伸ば